

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん ちようこく ぶつぞう
平成知新館1F-1(彫刻)の「仏像入門」について勉強してみよう。

ぶつぞう
仏像は何からつくられて
いるの？

ぶつぞう こんじき かがや きんぞく
仏像は金色に輝いているものも多いので、金属からつくられていると思う人が多いかもしれません。たしかに銅の表面に金メッキを施したのも、古代を中心につくられました。しかし、国のおおよそ3分の2の面積を森がしめている日本では、木からつくられたものが圧倒的多数です。一方、日本以外の国々、たとえばお釈迦様のふるさとインドをはじめ、中国や朝鮮半島では石の仏像がたくさんつくられましたが、日本ではあまり流行しなかったようです。このほか奈良時代には、中国・唐時代の影響を受けて、漆や土を素材とした仏像も流行しました。「えっ、土から仏像をつくるの！」と驚いた人がいるかもしれませんが、国宝の仏像にも土でつくられたものがあります。

では今日は、仏像にはどんな素材がもちいられているのかをみてみましょう。

【石】

図1はガンダーラでつくられた仏像の頭部です。とてもかたい石からできているので、つくられた時の形がしっかりと残っています。このように、仏像が誕生したパキスタンのガンダーラ地方やインドのマトゥラー地方、さらには中国や朝鮮半島では、石の仏像が数多くつくられました。ところが日本では石でつくられた仏像が流行する時期は、とても限られています。源平の合戦で被害を受けた奈良の寺を復興するため、中国から多くの技術者がまねかれた鎌倉時代はそのひとつです。東大寺南大門の有名な仁王像の裏側には、大きな石の獅子像がありますので、ぜひ振り返ってみてください。

【銅】

ぶつきよう どうせい ぶつぞう
仏教が伝来した6世紀から8世紀ころにかけては、銅製の仏像が流行します。とくにお寺の中心となるご本尊さまは、銅でつくるのが基本でした。また、個人むけの小さな仏像も銅でつくられました。銅といっても錫や鉛が混ぜられていて、その表面に金をうすくメッキして光り輝かせています。金色は仏さまのからだがり輝いていることをあらわしています。今でも金はいへん貴重ですが、昔の人もわずかな金を大切に使うために、メッキという技法が用いられたのです。

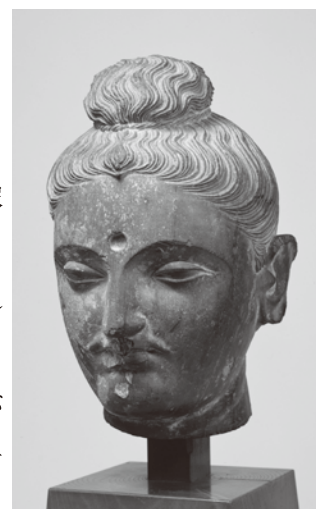


図1 如来頭部
パキスタン ガンダーラ(2~3世紀)
京都国立博物館蔵

【漆】

中国では漆や土で仏像をつくることも行なわれました。日本では奈良時代にその技法が流行します。漆の場合、基本的には木の骨組みの上に土で形づくった土台や、木でおおよその姿をつくった土台の上に、おがくずなどと漆を混ぜた木屎漆というペースト状の素材（ピーナッツバターを想像してください）と、漆にひたした布を張り重ねて形づくりします。手間はかかりますが柔らかなすがたの仏像をつくるのに向いています。

【木】

木材は、日本でいちばん多く仏像の素材として用いられてきました。飛鳥時代にはクスノキ製のものが多く、次第にカヤやヒノキに変わっていきました。東日本を中心にケヤキ製のものもみられます。古くは「一木造」といって、像の主要部分をひとつの木材から彫り出していましたが、平安時代の後半には、複数の木材から作り出す「寄木造」などの技法が考え出されました。この技法を完成させたのが、宇治・平等院の本尊阿弥陀如来坐像をつくった定朝という仏師です。図2は、定朝が生み出したス

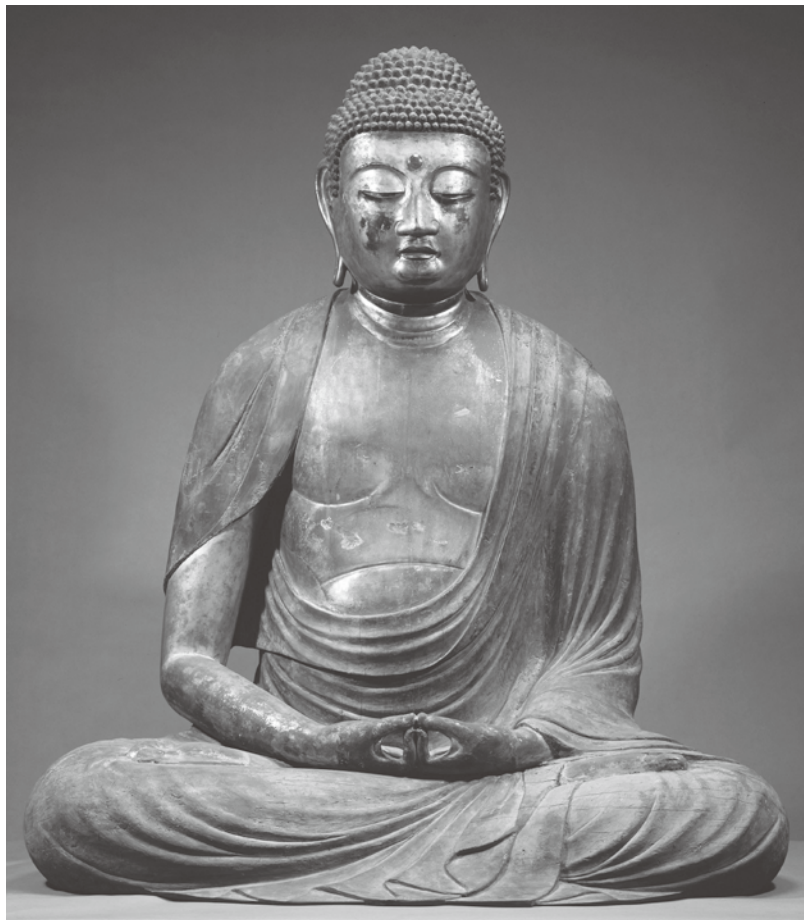


図2 阿弥陀如来坐像 平安時代(11世紀) 京都国立博物館蔵

スタイルによってつくられた阿弥陀如来像です。丸みを帯びたおだやかなすがたが特徴です。このようなスタイルは、藤原氏をはじめとする当時の貴族たちの好みによくあい、100年以上にわたって流行したのです。

以上、仏像にもちいられている素材についてみてきました。今みている仏像が何からつくられているのか、どうやってつくったのか、いろいろと考えながら仏像をみると、つくった人の気持ちがみえてくるかもしれません。

(美術室 浅湫 毅)